

二つの顔を持つ緑谷出久

青二才

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

出久には個性が無かった、でもヒーローになりたかった。そんなとき、彼が一番憧れたヒーロー、オールマイトに会うも絶望を味合わされてしまう。

そして、そのまま自分の生涯を閉じようとして飛び降り考えたとき、声が聞こえた……

そして出久は自分の得た個性について知り、様々な人を見ていく間に今のヒーロー社会が持つ闇を知った。そんなとき、ある人物から声をかけられて……？

これは、デク君がワンフォーオールを受け取らず、ひよんなことから敵連合の協力者となり、自分の思い描く本当のヒーローを目指していく物語です

第1話は最終宣告の歌詞を骨組みにして話を作っています

目次

絶望と希望と伸ばされた手	1
闇との交流、僕が受けるのは……	12
特訓と慈善活動、かつての憧れとの再会	17

絶望と希望と伸ばされた手

あるビルの屋上に、1人の少年が居た。

「個性がなきや、こんな夢は叶わない…。夢を見ることすら烏滸がましいって言うの？」

彼は誰に向けることもなくそう呟いた。…。彼、緑谷出久は憧れた存在であるオールマイトにヒーローは諦めた方が良いという旨の言葉をついさつき聞かされたのだ。

『何言ってるの？君には、個性があるよ？』

幼馴染みに言われた「来世は個性が宿ると信じてワンチャンダイブ！」という言葉通りに飛び降りようとした瞬間、そんな声が響いてきた。

「え？誰？っていうか僕に個性があるってどういうことさ!？」

出久はその声の主を探してあたりを見回したが、誰も見当たることには無かった。

『…。まず最初の質問から答えるとね、僕はまあ…。君らで言う所の死神って奴だよ。訳あって僕は君の生まれた時から君の精神の中に住み着いてたんだ。』

『次に、君に個性があるって言うのは、君のお母さんの「ものを引き寄せる」っていう個性に僕の力が少し混ざったことで「死んだ人か渡したいと思われた相手から個性を引き寄せる」っていう個性になったんだ。凄いでしょ？』

頭の中に直接響いてきた声の内容に、出久は絶句した。死者か自分の個性が嫌な相手から個性を引き寄せる…。つまりは望まれさえすれば誰からも個性が貰えるということなのだから。とても、ヒーローとは思えない個性だ。敵のそれじゃないか…。というか、ヒーローと敵の線引きって何が正しいんだろう？さつきのことがあるから全然わからない…。

『…。なんで今まで病院で検査してもわからなかったの？』

『ああ、その時にはまだ時間が短くてね、力が個性として発現して無かったんだよ。それに、君はまだ身内に死んだ人は居ないだろう？だ

からわからなかったのさ』

出久の頭に響く声は、淡々とその理由を述べあげて最後にニヤリと笑った。

「…この個性は一体どんな原理でこんなことが出来るんだろ…？」

『おいおい、君の考察癖は知ってるけどそれは愚問だぜ？世界を全部綴った数式ですら解読不能なものが命なんだからさ』

出久は一通り説明を聞かされるとすぐに得意の考察に入ろうとしたが、それは死神によって阻止された。

「そっか、そうだよね…いきなりのことでまだよくわからないけど、ありがとうね…えっと…」

「僕に…名前なんてないんだが…まあハロスとでも呼んでくれ」「わかった！よろしくね、ハロス」

こうして、緑谷出久と死神『ハロス』の奇妙な共生生活が始まった。

『お前さ、この個性でもヒーローになりたいと思う？』

「え、なんでいきなりそんなことを？」

『いや、だってこれ絶対敵向けじゃん、殺した相手の個性が奪えるんだぜ？』

「…正直、何がヒーローで何が敵か、何処からがヒーローでどこからが敵なのかがわからなくなったんだ」

「相手を思っただ個性を使っても、許可が無い一般人ならヴィジランテとして犯罪者だ、僕みたいにも、ヒーローに憧れても結局は「個性が無いなら諦めろ」って言われる…僕はあの思考も敵だと思ったよ」

『はあ、やっぱり人間で怠惰だよな』

『？どうしたのいきなり』

『だってさ、粗雑に時間を費やしたくせに、明日は良いことありましように』って今日に祈るんだぜ？』

『それに、いざ自分が体を悪くして病気になったらその惰眠で捨てた秒針にすら嘔りついて生きたいって継るんだ、滑稽で仕方ないよ』
「はは、でもそれは仕方ないことだよ、わがままなのが人間なんだから」

『そうなのかね…？お、あんなどこに今にも死にたいって顔してるやつが居る、行ってみようよ』

「やあ、なんで君は自殺なんて考えたの？」

「… あんたには、関係ないことじゃない！どっか行ってよ！」

「別に自殺を止めようとなんて思っただけから良いじゃん、それよりさ！君の個性のことを教えてよ」

「… 変なヤツ… まあ良いわ、どうせあんたも皆と同じなんだから。私の個性は「相手の口から思ったことを言わせる」ってものよ。暗証番号とか秘密だって聞き出せるわ。」

「私、ヒーローに憧れたのに、こんな個性だから「お前は敵にしかかなれないんだ」って皆から言われたわ。だから死んだ方がマシだと思ったの。どう？満足？」

『なあどうだい？やっぱ人間なんて死にたがりばかりだ。それに、この世界に個性差別があるからこんなとるに足らないことを救われない惨状だと思うような病状になったんだ』

「やっぱり、ヒーローは希望だけど絶望もそれ以上に生むんだね」

「… あんた、何言ってるの？」

「いや… 良い個性だねと思ってさ」

「え？」

「だって、警察の事情聴取でその個性があれば簡単に自白させられるじゃん、自分が思い出せないことだって言わせられるかもしれないからすつごく良い個性だよ！欲しいなあ」

『さあ最終宣告だ、その個性で生まれ落ちた故に人生がワンサイドゲームで散々だって思っただけその命を投げ捨てるならボクらに頂戴？』

『ねえ、君が死んだら僕がその個性もらって良い?』

「… ふん、あんたがそんなこと言うから死ぬ気なんて無くなっちゃったわよ!」

そう言うとその少女はビルの階段から降りて行ってしまった。

「君は、何で死にたいなんて思ってるの?」

出久は、いつものように死にたがってる人に近づいてそう相手に問いかけた。

今回の相手は小柄で気弱そうな少年だった。

「… 僕はね、短時間だけど思考を鈍らせることができる個性があるんだ」

彼は、弱々しい口調で理由を話し始めた。

「そのおかげで僕の周りには人が誰も寄り付かなくなっちゃったんです。〃お前と居ると良い判断が下せなくなつて何もかも失敗するんだ”つて。」

「それに、僕自身もこの個性で考えるのが遅くなつて事故に遭いやすくて、安全に居る方法なんて誰かに助けてもらうしか無くて、でも誰も僕の側に居てくれないから、それなら死んでしまった方が楽になると思つたんだよ!」

最後には、自棄になつたように泣き叫んでその全てを吐き出した。

『ハッ! 死んだからつて救われるわけでもないのに何で皆死のうとするのかね、』

ハロス理由は聞き終えた後に軽蔑したような口調でそう吐き捨てた。

「… ねえ、君つてさ〃本心から〃死にたいつて思ってるの?」

「… それは…」

「僕はね？その話を聞いて君の個性は良いものだなって思ったな」

「え…？何で」

「だって、その個性があれば今の君の死のうとする決心だって鈍らせることが出来る、誰かを助けられるなって… そう思ったから」

「……」

『まあ、僕は死神だから止める気は無いよ… さあ、聞いてあげるから最期に言い残した言葉を言ってみて？』

「… やっぱり、自殺するのはやめておきます… 決心が鈍っちゃいましたから」

先ほどとは打って変わり、少年は晴れやかな顔をして笑い、自殺を諦めた。

『なあ、何でお前っていつも死のうとしてるやつと話すんだ？決心鈍らせるだけだろ？』

ハロスは出久に自殺志願者を更生させるような言葉をかける意味を聞いた。

「ただの自殺志願と夢のひともないようなやられっぱなしのままではっばらばなしの人の個性なんて貰ってもそんなのちっとも嬉しく無いよ、だから僕はいつも言ってるんだ、君は本当にそれで終わりでいいのか？ってね」

出久は悲しそうに笑いながらそう言い、その場から離れる為に歩き始めた。

『フツ、やっぱり変なヤツだなお前』

『もうこれで十ヶ月だよ？どうだい？人間がどんなに死にたがりか分

かった?』

ハロスと初めて会話した時から十ヶ月が過ぎ、2人の学校終わりの自殺志願者探しも板について来た頃、ハロスは出久にそう言葉をかけた。

「うん、そうだね、でもさ?」

『ん?なんだ?』

「僕の見てきた自殺志願者は殆どが自分の個性によつて憧れを絶たれた人ばかり…。だった。僕と…。一緒なんだよ」

言いようのない苦しさに堪えるように言葉を詰まらせながら出久はそう答え、泣きそうな顔をして笑った。

『自分と重なるから…。だから助けたいってか…。お前のそういうところはつくづくよくわからなかったけど、もう良い加減分かるようになってきたよ』

「はは、ありがとう。でもごめんね、ハロス」

出久はお礼を言ったが、死神にとつて魂…。この世界で言えば個性か、が捕れないのはもどかしいと思い、そう謝った。

『別に良いよ、もう僕は長くお前の中に居るから死神としての力は振るわなくても誰にも咎められないし、お前のこの先が気になっちゃったから』

「はは、そっか…。ならば、これからも一緒にいてよ、最高の『相棒』として」

『…。嗚呼、喜んで…。緑谷出久』

「でも、最近はヒーローになりたいって思わなくなっちゃったな」

「一部かもしれないけど、僕が見てきた人たちは自分の個性で苦しんで、絶望してた、希望を見せて憧れを抱かれる存在がヒーローなのに、自分が弱い個性だからなっちゃいけないなんて絶望させるなら、僕はヒーローになんてならない」

「たとえ違法だとしても、自分が正しいと思えば、ダークヒーローにでも敵にでもなつてやる」

「つと、あそこ……誰か居るね」

話を強引に切るように出久はこの半年で鍛えられた観察眼によって紫髪の少年が非常階段からビルの屋上に向かっていることを報告し、足早にそこへ向かった。

『アイツ……今まで見てきたヤツとは明らかに違うな』

「……そうだね、一番自殺願望が強そうだ」

ハロスと出久の意見が一致し、今回こそは欲しいものが手に入るかと思いつきながら彼を追いかけた。

「……ねえ？君はどうしてこんなところに居るの？」

まずはいつも通り、後ろから声をかけた。

「いきなりなんだよお前、見てわからないか？これから死ぬためだよ。止めても無駄だぜ？」

言葉を返した少年の目はひどい隈があり、瞳には全てを諦めた色しかなかった。

「別に止める気は無いから安心してよ。代わりにさ、最期に教えてくれない？君の個性について」

少し気圧されたものの、出久は柔らかい笑みを崩さないでそう問いかけた。

「……洗脳」

短く吐き捨てられるように紡がれた言葉には、自身の個性に対する憎しみが感じられ、到底言い表せないような苦悩があったことが感じ取れる。

「それで、死にたいって思うつてことは問いかけに応えたら個性が発

動しちやうの?」

「ああ… だから誰も俺と話したがないし、敵にうってつけの個性だって皆から言われたよ。でもさ、俺は憧れちまったんだよ、ヒーローに」

この際だと思つて全てを話すことに決めたのか、紫髪の彼は饒舌になり自分から話してくれた。

「……………」

「だから足掻いてみたさ、体を鍛えたり、勉強したり、ヒーローに必要なだって言われていることは色々やってきた。でも、無理だったんだよこの個性のせいだね」

そう言い終わると彼は出久に背を向け、屋上のフェンスに両の手をかけた。

「…：… ねえ?今ここで前触れもなく死んじゃうのも良いと思うよ?でもさ、これからも足掻いて抗つて、夢に向かつて歩き続けたほうが今より幾分でもマシな未来になるよね?まあ、ここはこんな『良い個性』至上主義の悴んだ世界なんだよ…：… でも、夢を諦めたく無いんでしょ?それならさ、どんな苦悩があつても無様に生きてみせろよ」

『そんなにヒーローにうってつけの良い個性なんだから』

『さあ、最終宣告だ。こんな個性で生まれ落ちたから人生が敵一択のワンサイドゲームで散々だって投げ捨てるくらいなら…：…』

『これから君が死んだらさ、その個性、僕に頂戴?』

「…：… こんな個性をヒーロー向けだなんて、どういう意味だよ」

出久の言葉で少年の右手はフェンスを離れ、体の向きが戻った。

「会話さえできれば、誰も傷つけないで事件の犯人を無力化して捕まえられるんでしょ?そんなの、とつてもヒーローに向いてる個性じゃないか」

出久は「何を驚いてるんだ?」とばかりの顔で当たり前のようになう答え、ふわりと笑った。

「……………」

『(ノーワンエスケープステスだよ、それに、コイツはどうしようもないリーパーだ、だから、)』

「… ははは、お前… 本当にすげえよ。最初はどうせ死ぬからこんな個性あげても良いって思ってたけど、そんなこと言われたら死ぬになっちまった」

少年は初めて憑物が落ちたような笑顔を見せ、自殺をやめると宣言した。

「… そっか、残念だな」

晴れやかな顔をした出久はその表情とは裏腹にそう呟いた。

「どんな人間だっけ行く先は終点なんだ… 好き勝手やった結果が人生だっけ言うならさ、俺はお前死神に追われ続けてでも…」

『最終宣告だよ運悪くこんなリーパーに捕まった哀れなスイサイダール… 最期に言い残した言葉を言え…』

「俺はまだ生きて、足掻きながら夢を追い続けるよ」

少年はそう言い切ると出久の横を通り、非常階段のところで立ち止まった。

「そっか、死にたくなったらまた僕のところにおいて、その個性を貫うからさ」

「考えとくよ、ああそうそう、俺の名前は心操人使だ。覚えといてくれよ… ありがとな、『俺のヒーロー』」

そうして最後に自己紹介を終えると彼は階段降り始めた。

「…………… また、何処かで会えると良いね。今度は、死に際以外で」

『もういい加減分かっただろ？君は自殺志願者をどうしたって助けちゃうような根っからのヒーローなんだよ、老人とか余命宣告されたような病人の横に立って、そいつが死んだあと個性をもらう方が合ってると思うよ』

ハロスはそう言うため息を吐きながら精神の奥底に引っ込み、静かになってしまった

「…うん、そうする。見守っててくれてありがとうね、ハロス」

「なあ君、ちよつと話があるんだが、良いかい？」

「…どうしたんですか？」

「君の考えに興味が湧いてね、少し話をしないかい？」

「…どうして貴方が僕のことを知ってるんですか？その風貌からすると、貴方は敵ですよね？」

「…確かに僕は敵だ、でもね、誓って僕は君をどうにかしたいわけじゃない」

「…信じられる根拠がありません、お断りさせてもらい…!？」

「あそこであれ以上問答をするのはマズいからね、僕の隠れ家に来てもらった、手荒になったのは謝る、謝罪の意思として君がもしこの話で僕の思う答えを出してくれなかったとしても何もしない。だから話をさせてくれ」

「…わかりました。僕が抵抗したところでどうにかできる相手じゃ無いですし、良いです」

「僕が調べたところによると君は、オールマイトに絶望を与えられたそうじゃないか」

「平和の象徴が絶望の淵にいた無垢な子供を突き落とす。僕は彼が心底憎いからね、助けてあげたくなつたんだよ。君になにか個性をあげよう」

「…もしそれが本当だとすると、本来貴方が求めた見返りは何ですか？」

「僕の後継者、死柄木弔の補佐をやってくれ」

「僕は本心から敵になりたいわけじゃ無いです。でも、個性を最重要視する今のヒーローは苦手です…。だから、もし本当に貴方が個性をくれると言うなら、協力者にはなりたいです」

「十分だよ、ありがとう。」

「そうだね…。これなら気に入ってくれるかな? 『進化』っていう個性なんだけど」

「聞く限り、自分が研鑽を行う限り強くなり続けられる個性でしょうか? 良いですね…。それ、欲しいです」

「なら、あげよう…。さあ、手を…。!!?」

「ああ、僕の個性は相手が渡したいと思えば個性が譲渡されるものなんですよ」

「これは…。驚いたね、君をこちら側に引きこめて正解だったよ。これからよろしく、僕の協力者。僕はオールフォーワンと名乗ってるんだが、聞かれると厄介だから先生とでも呼んでくれ」

「僕の名前は…。貴方のことだから知ってるでしょうけど緑谷出久と言います。これからよろしくお願いしますね、先生」

そう、これは、僕と最高の相棒が二人で敵ダークヒーローとなる物語だ

闇との交流、僕が受けるのは……

オールフォーワン…… もとい「先生」と協力者の関係になった出久は、その場でワープの個性を持つ黒霧という男を紹介され、日曜日に先生の後継者が普段使っているアジトにて顔合わせをする約束を取り付けられた。

そして学校のある平日の時間はいつも通りの日常のためかあつという間に過ぎて行き、顔合わせ当日になってしまう。

『なあ出久、お前本当に敵側に行って良いのか？お前はヒーローになりたかったんだろ？』

純粹にヒーローに強い憧れを持っていたことを知っているハロスは、指示された目的地に向かっている途中でそう質問を投げかけた。

「ハロス…… 前にも言ったけど僕は自分の憧れてた理想のヒーロー像が壊れちゃったんだよ、そりゃあ、ヒーローは好きだし、憧れるけど…… 今のヒーローはただの仕事だったり、抑圧のための装置なんだろうと思う。だから、本当の意味のヒーローに僕がなるんだ」

出久は諭すような声音で口を開き、絶妙に返答としては不十分な回答を言った。

『ふーん、じゃあ聞くけどさ、出久の思い描くヒーローってどんななんだ？』

何故本当のヒーローになることが敵としての存在になることなのか、それが理解どうしても判らなかつたハロスは質問を変え、問いかけた。

「んー…… 個性は関係無い、肉体的にでも精神的にでも変わらず、ただ誰かが助けてもらいたいと思つた時に何を差し置いても手を伸ばせて、解決させられるヒーローかな。その人がもし敵だったとしても、その人なりの信念があれば僕は傷つけることなく救いたいよ」

出久は最近の落ち着いた表情から一転して、年相応の顔になり、理想を語った。

『ははっ子供らしい壮大な夢だな。まあでも、お前には取れる選択肢

が多くなるから、あながち無理でも無いかもな』

出久の返答に思わずハロスは笑い、彼なりのエールを送った。

「…ありがとう、それに、僕が敵の協力者になったのも、ヒーローとしての縛られた活動だけじゃ救えないものがあるかもしれないからだよ、オールマイトに言われた通り、現実には綺麗なだけで理想を掴めるほど甘いわけじゃ無いんだ」

『歪んだくせに真っ直ぐだな…ヒーローもダークヒーローも両方目指すのか、本当に面白いな、出久は』

ハロスの見てきた出久のこれまでの人生はまさに逆境だった。自分が無個性だと分かった4歳の頃には、弱者の烙印を押されていた。それでも出久はヒーローに憧れ、夢を捨てきれずに足掻いていた。そして、憧れた存在に藁にも縋る思いでNo.1ヒーローに質問するも、目を背けてきた現実を直視するよう諭されたことで絶望させられた。人の暗い部分を多くみてきて、ヒーローを憎み、歪んだ悪になってもおかしくない境遇だった。それでもなお彼は、どうあっても人を救う存在になりたいという夢を口にした。人間自体を怠惰かつ弱い生き物だと思っていたハロスにとって出久の存在は何より格好良く、どんな形であれ、彼なら最高のヒーローになれると思っていた『（ここまで辛い目を見てきたお前なら、万人の希望になれるだろうな）』

「っと、約束の時間になっちゃったね、中に入ろうか」

「…ガキ？おい黒霧、なんで俺の嫌いなもんをここに連れてきた？」

バーのドアを開き、中に入ると薄い青…いや、灰色の髪をした青年がカウンターに座っていた。男は出久を見るなり嫌悪感を剥き出しにして、向かい側にいる黒霧を睨んだ。

「死柄木弔、彼は…「良いよ、僕が自分で自己紹介するから」」

黒霧が出久を紹介しようとするが、それを出久自身が制した。

「僕は緑谷出久、本当の意味で敵になりたくは無いから敵としての名前はまだ考えて無いけど、一応君の先生にあたる人物に勧誘されて協力者になりました。あの人の申し出を受けた理由は、絶望の淵にいた人間を助けずに耳障りの良い正論で更に追い込んだくせにヘラヘラしてるヒーローと、相性が不利だったら何もしようとしないうのヒーロー社会が嫌いだから…。まあ他に気になったことがあれば他にも聞いてください、死柄木さん」

自己紹介を始めた出久はとても中学生が出来るような表情では無い、まさに『失望』と『怒り』が混ぜられ、熟成されたような顔をしていた。だが、それも最後には満面の笑みを浮かべて男…死柄木弔に話を振った。

「…ああ、さっきは嫌いだなって言って悪かったよ、お前とは仲良く出来そう。俺のことは先生から聞いてるんだろうが、気軽に弔って呼んでくれ。よろしく、緑谷出久」

数秒の間死柄木は出久のことを注意深く見つめた後に敵意を緩和させてそう言い、中指を上げた状態で握手を求めた。中指を上げているのは個性の関係なのだろう、そう言ったこともオールフォーワンは言っていたはずだ。

「…じゃあ改めて、よろしく、えっと…弔君？」

出久は弔の手をとって挨拶をするが、中身はただの中学三年生だ。どうしてもぎこちなくなり、表情も硬くなってしまふ。

「ははっ！妙に達観してると思っただけで年相応じゃん、面白れえ」

弔は出久の年相応な姿を見て笑いだし、取り繕ったような表情も無くなった…敵では無いと認めてくれたからなのだろうか？。

「えと、じゃあ連絡先渡しておくから何かあったら掛けてきてよ、根っからの敵になる気は無いけど協力者なんだし。ああ、もしヒーローの情報欲しかったら言っただけ？結構色々なヒーローの分析とかしてるから」

出久も出久で態度が少し軟化し、まだ若干硬くはあるが笑みを見せてお互いの連絡方法の確認をしていた。

「そうだな、わかった。こっちはこのバーの連絡先に描けてくれれば良い。顔合わせだけなのにここに居てもらい続けるのも悪いな、黒霧……どこか適当な場所にでも送ってやれ」

弔の方からの連絡先を教えられた後、帰る為の手筈を整えてくれた。相手がただの中学生だとしても先生が直々に気に入って説得した協力者だと言うことを考えたのか、そのまま放り出すのでは無く黒霧に送るよう指示を出した。

「分かりました死柄木弔。では緑谷さん、貴方の家の近くにワイプゲートを繋げたので潜ってください」

黒霧は弔の指示に従ってゲートを繋ぎ、出久に潜るよう促した。

『ちよつと待ってくれ、黒霧』

「先生!」

「……どうかしましたか? オールフォーワン?」

いきなり聞こえてきた声……オールフォーワンに呼び止められて弔と黒霧は驚き、出久も出久で緊張が走っていた。協力関係になったとしても彼は間違い無く世界最悪の敵だ。そして今のところ彼に利は無いし、本当の仲間にはならないと宣言した以上手を切られる可能性などまさに彼の機嫌次第だからだ。

『ああ出久君、君には英雄のヒーロー科に入学して欲しいんだ、もちろん戦闘力向上の為にトレーニングはしてあげるから安心してくれ』

オールフォーワンの口から出た依頼は出久を驚かせるのに十分なものだ。『死神』の個性で死者か同意者の個性を譲り受けることが出来るとしても現状出久の力はオールフォーワンに協力関係の対価として貰った『進化』のみ。今から受験までの半年ほど鍛えたところで到底間に合わないからだ。

「……何故、英雄なんですか? 最難関のヒーロー育成校だからでしょうか?」

出久は最初から無理だと突っぱねることはせず、まずは理由を質問した。

『それもあるが、来年からオールマイトが教師になるらしいんだ。だから、アイツが絶望させ、ヒーローになれないと言い切った君を引き合わせたんだよ。アイツが絶望させ、少なからず悪感情を抱いている子供を入学させる、楽しいじゃないか！フフフフフ…』

オールフオーワンは嬉々として理由を教え、心底楽しい事を提示された子供のように笑顔になり。人を心から恐怖させる事ができるような笑い声を出した。

「…わかりました、そういうことなら出来る限り努力してみますよ。元々雄英には普通科で入るつもりだったので科の変更をすれば良いだけですし、鍛えても貰えるらしいので出来る限り頑張ってみます」
出久はこの様子ならオールフオーワンは自分次第で絶対に入学させられる手筈を整えていると確信し、快く引き受けた。

「そろそろ行きましょう、別段遅い時間では無いとはいえ、君の親御さんを心配させるとはいけませんからね」

事実、もう家を出て三時間は経っていた。流石に怪しまれないだろうが、家を出たのが13時でワープを使わなければ片道約2時間半掛かるのだ。受験まで後半年というこの大事な時期に遠出などしていたら心配をかけてしまう。

「ありがとうございます黒霧さん。それじゃあ先生、弔君、また今度」
出久はゲートを繋げて送ってくれるという黒霧に感謝をしてから後ろを振り返り、微笑みながら悪の師弟に挨拶をしてもやを潜って行った。

こうして、出久と未来の巨悪との初会合は終わりを告げたのだった。

特訓と慈善活動、かつての憧れとの再会

あれから更に数日後、僕はオールフォーワンに用意されたトレーニングメニューに目を通すことになった。

「……先生？これ、下手したら僕のほうが死にませんか？」

僕はオールフォーワンの修行内容を見て、思わずそう声を上げた。「だが君も自分で僕があげた『進化』の個性を伸ばしているだろう？それを手助けするだけさ。大丈夫、いくら何でも死なせはしないよ」

彼は諭すように僕に言ってくれるが、薄く浮かべている笑みのせいで信用することが微妙に出来なさそうだ。

「……先生がそう言うなら良いですけど……それでも個性複数持ちの怪物の性能テストを兼ねて戦うっていうのは怖いですよ」

そう、僕の修行とはオールフォーワンとドクターが一緒になって作っている個性複数持ちの怪物、脳無を倒すと言う狂気じみたものだった。

「出久君、こいつらは脳無じゃ。わしの悲願たるマスターピース作成のための素となる高尚な存在なのだよ。怪物なんて品の無い呼び方はせんでくれ」

ドクターは訂正を求めてくるけど、正直怪物にしか見えないからしようがないと思う。

「ああごめんなさい、なんか姿形が苦手だったので嫌悪感が出てそう呼んでしまいました」

「まあ見るのが初めてなら仕方ないかのう……残念じゃ」

ドクターは僕の返答を聞くととても残念そうな顔をして俯いてしまった。

「ドクター、まだ試作段階なんだから別に良いじゃないか。それよりも出久君の特訓を兼ねて性能テストをするんだろう？」

オールフォーワンは彼を見兼ねたのか、ドクターの背中を叩きながら励ました。

「そうじゃな……出久君！まず前提に知っていて欲しい事だが、脳無

には4種類ある。下級、中級、上級そして最上級じゃ」

立ち直ったドクターは僕にそう嬉々として話してくれた。

「…性能は名前の通りと考えて良いんですね？」

「ああそうじゃ、君の最終目標は最上級と渡り合うか上級を倒すこと。だが今からでは下級を圧倒するか中級と互角か少し劣るくらいにしかならんと思うね。先生の連れてきた人間という特権でわしが複製した個性を二つか三つくらいならくれてやる。これから入試までの間でそこまではやってのけてみなさい」

「強さは戦ってみないと分からないけど、やってみます」

聞いている限りふざけているとしか思えない目標を提示された…絶対殺す気でしょ『大丈夫だ、死にそうになっただら意識乗っ取って思いつきり離脱してやるから。だから足だけは無事にしといてくれ』…そう言う意味じゃないんだけどなあ…

「フッフ…楽しみにしているよ、出久君」

「やっぱり、続けてたら死んじゃわない？これ」

初日の訓練が終わっていつものバーに帰った後で僕はそう愚痴を零した。

「お疲れ様です、出久さん」

カウンターの奥から声が聞こえ、オレンジジュースが目の前に置かれる。

「あ、黒霧さん」

「全く、先生がたも無茶を言います…。中級の脳無でも十分プロヒーローを殺しうると言うのに…」

黒霧さんはため息をつきながら僕に心配な目を向ける。

「まあ、これから毎日一度は死ぬかも。って思ってますけど、相棒のハロスも居るし何とかしますよ」

僕はその目を向けられながらも笑い、安心させるように努めた。

「頑張ってくださいね、代わりと言ってはなんですが帰りは近くまで送りますから」

「ありがとうございます…。あ、今日は家の近くの海浜公園につなげてくれませんか？追加の特訓を兼ねたごみ掃除がしたいので」

僕は黒霧さんの申し出を受け、即座に変える準備を始めた。だが、まだ本当に家に帰るわけではないから荷物をまとめただけだ。

「そのストイックさを死柄木弔にも見習って欲しいものですね…。いいでしょう、お送りしますよ」

黒霧さんは何やら悩んでいたが、しばらく瞑目して頭を振ると、ゲートを開いてくぐるようにうながしてくれた。

「それじゃあ黒霧さん、またあした！」

「…… 相変わらず凄い量の漂着ごみだなあ」

敵連合のアジトからワープゲートを使って僕が送ってもらった場所は、波の関係で漂着物が沢山流れ着き、今や美しい景観など無くなってしまった海浜公園だ。

『掃除のしがいがあるんじゃないか？』

ハロスが実体化（といっても今の彼は零体だが）して僕の眩きに返事してくれた。

「あ、ハロス。全然声かけてくれなくて心配してたよ…もしかして連合の皆のこと嫌い？」

『連合が嫌いってより、あの先生とドクターってやつが苦手なだけだ。人を人と思ってるねえ』

「ああ…僕もその気持ちわかるかも。でもさ、他は良いの？」

『まあ、好きなわけでもないが、良いと思う。曲がりなりにも人を殺すことに目的があるからな』

「…よくわからないな」

『簡単に言えば、他人の命を使って遊ぶ外道か、ただ何かの目的のために人殺しをする悪人かの違いだ』

「ああ、死神からすればただ何か目的があって殺してる方がまだ許せるのか…納得」

『…そろそろ無駄話をやめて掃除を始めたらどうだ？やるんだろ？』

「うん！奉仕活動はヒーローの基本だからね」

僕はハロスとの敵連合に関する話を切り上げてこの公園の掃除に取り掛かることにした。特訓第二弾開始だ！

「疲れた…」

開始からしばらくして、僕は今日片づけた一角に大の字に寝そべって脱力していた

『そりゃ三時間もやってりやそうだろうよ。飲み物でも買ってくるから待ってろ』

ハロスはあきれ半分でそう言うどふよふよと飛んで自販機に向かった。一応ハロスは半分霊体と完全な霊体の二種類になれるからモノに触れることもできるらしい。

「ありがとうハロス…」

「ん？お金は持って行ったよね？何で……」

5分もせずに戻ってきたことを不審に感じた僕は顔を動かさずにハロスに問いかけた。

「お前にお客さんだ。そいつが飲み物持ってたから引き返してきた」

「……今更何のようですか？NO1ヒーロー」

顔を上げてハロスの横にいる男性を見ると、それは痩せすぎて何の力も感じないトゥルーフォームのオールマイトがいた。

「…君に、謝罪と訂正、それと身勝手ながら提案がしたくてね」

オールマイトは重々しい雰囲気纏って僕に話しかけてきた。

「内容は読めます。だから貴方は何も謝る必要も、訂正する必要もありません」

僕はオールフオーワンから聞いていた彼の持っている個性と、以前された話を思い出して言いたいことを先読みすると、先んじてそれを制した。

「でも…君はヒ「僕はね、オールマイト」…何だい？」

それでも僕に謝ろうとしてくる彼の発言とかぶせるように僕は口を開いた。

「貴方に夢を否定された時、あのビルから飛び降りて死のうかと思ってた。でも、奇跡みたいな話だけど今は最高の相棒になってくれた人が力をくれました」

「それはどういう…？」

「言う必要ありますか？まあでも、その力は単体じゃあまり意味が無

かったから、沢山の人と話をしました。ヒーローに憧れたけど個性のせいで諦めて命を絶とうとした人、敵向けの個性だとヒーローに憧れることすらやめて死のうとした人。個性が強くても生まれつき体が弱くて寝たきりの人も居ました」

「ああ、子供の持つていた個性が自分の弱点を補完できるからって理由で、愛してた夫が豹変して子供を虐待紛いの特訓を強いたことで精神を病んだ人も居ました」

僕は淡々と自分がオールマイトに否定されてからのことを話した。途中で彼が口を挟もうとしていたが、それもさせない。

「……」

「どこへ行っても個性、個性、個性。正直個性を欲しがってた僕が馬鹿みたいだと思いました。個性を使わないでも、僕をヒーローと呼んでくれる人がいたから」

「だから僕はヒーローを諦めた訳じゃない。でも、今ある個性至上主義なヒーローは嫌いです」

自分の考えとヒーロー観を伝え、一旦言葉を区切ってオールマイトに発言権を譲った。

「……言いたいことは分かった。でも、さっきの話からすると今は君も個性があるのだろうか？今活躍しているヒーローと根本では違うわけでは無いじゃないか」

「確かにそうです。でも、僕はただの犯罪抑止策としてのヒーローじゃなく、僕は称号としてのヒーロー、遥か昔に失われた本当の意味でのヒーローという存在になって、その本質を取り戻したい」

「だから、手を貸してくれた人の想いを背負って、僕はヒーローを目指したいんです。言うとならば皆は一つの目的の為にやってますよ」

「つつ……!!」

「提案は聞きたいですけど、もう遅いので明日で良いですか？日曜ですし」

思いの全てを吐き出した中で、僕は敢えて彼が動揺を隠せないだろう人と同じ言葉を使った。予想通りに彼が言葉を詰まらせると同時

に僕は背を向けて帰ろうとした。

「いや、すぐ済むからそのまま聞いてくれ」

「そこまでの正義感を見込んでの頼みだ。私の後継として…個性を継いでほしくないか？」

言外に断っていたものの、オールマイトはそれを気にせず個性の秘密を暴露した。…何のために僕が断ったのか分からなくなってきた。

「えつと…『残念だが、こいつをお前みたいな平和の象徴人身御供にさせるのは嫌だ。他をあたってくれるか？』」

「そういえば君は彼の近くにいたが…どんな関係だい？」

『俺はハロス、こいつの相棒みたいなもんだ』

僕がどう断ろうか考えを巡らせていると、成り行きを見守っていたハロスが口を挟み、オールマイトの提案をバツサリと切り捨てた。

「…君に受け取ってもらうのは難しそうだな、ひとまずこれで失礼するよ。長々と引き留めてすまなかつたね」

ハロスの言葉に流石に彼も諦めたのか、僕に謝罪して家へ帰るよう促してくれた。

「僕は多分雄英に入学するので、また同じことを言いたくなったら訪ねてください。では、これからもヒーロー活動頑張って」

僕はそう言い残してかつての憧れと別れた。